

リービ英雄『千々にくだけで』を読む —「越境文学」の可能性—

宮田 文久

日本大学大学院総合社会情報研究科

Reading Levy Hideo's *Thousands and Thousands of Pieces* —The Possibility of “Border-crossing Literature”—

MIYATA Fumihisa

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

This thesis examines “border-crossing literature” that spans different languages and nations. “Border-crossing literature” has been regarded as a genre of the multilingual; however, I would like to argue that this literature has importance for the monolingual as well. In order to demonstrate that, I will discuss Levy Hideo’s work *Thousands and Thousands of Pieces* (Chiji ni kudakete, 2004) in this thesis. Levy epitomizes the complicated dynamism and various problems of “border-crossing literature.” In addition, *Thousands and Thousands of Pieces* is an important work in which Levy responded to “9/11” with his multilingual skills of Japanese, English, and Chinese. First of all, I analyze the genealogy of “border-crossing literature” and discuss related linguistic concepts such as “minor literature,” suggested by Gilles Deleuze and Pierre-Félix Guattari. Secondly, I examine the worldview of *Thousands and Thousands of Pieces*. Finally, I explore “border-crossing literature” from other existential perspectives such as the “collective memory” of Maurice Halbwachs, “the angel of history” by Walter Benjamin, and so forth. Drawing on linguistic and existential viewpoints, this thesis points to new perspectives on “border-crossing literature.”

1.序

本論文では、「越境文学」を複数言語使用者以外へ、さらに単一言語使用者へ——自らを単一言語使用者だと認識している、潜在的な複数言語使用者へ——も解放する地点へ分析を進めることを目的とする。ここでいう「越境文学」の定義とは、国家・地域間の移動などを経て複数のアイデンティティを保持することとなり、主に複数言語（非母語など）を獲得することによってその独自の作品世界を構築するに至った「越境者」たちによって執筆される文学のことである。本稿では、その「越境文学」の中から重要な具体例として、リービ英雄『千々にくだけで』を取り上げる。一般的には「西洋出身者初の日本語作家」として知られるリービ英雄が、<9・11>の衝撃を私小説として綴った『千々にくだけで』は、現

実／作品世界を根幹から揺さぶる、アレゴリカルな<9・11>を、日本語、英語、さらには中国語も取り入れた末の言語的複数性において受け止めようとした軌跡そのものが作品化されたものとして捉えることが出来る。一方で、一見自由に見える「越境文学」の担い手でありながら、「一人の作家が、ひとつの言語で書くと、その言語の歴史を全部背負う」（リービ2010、119）と述べるリービは、「越境文学」がもつ複雑なダイナミズム、多様な問題系を捉えるのに有効なアイコンであると考ええる。

複雑なダイナミズム、多様な問題系とは、ひとつに「越境文学」は言語的営為であることに関係したアジェンダ、他方で「越境者」の生という実存的な立ち位置にかかわるアジェンダのことを指す。これら二つのアジェンダが密接に関連した「越境文学」

のアイコンとしてリービ作品の分析が有効なのだが、議論の展開をここで大まかに先取りしておきたい。

言語的営為としての「越境文学」を捉えるとき、そこにはドゥルーズ／ガタリが提唱した「マイナー文学」といった関連概念の再検証が必要であり、第2章は主にこれまでの「越境文学」の系譜、その捉えられ方、周辺概念を渉猟していくこととなる。亡命タイプの移動モデル、ポストコロニアル文学、「移植型」の〈境界児〉といった、「越境文学」におけるタイプなどを踏まえながら、言語的営為としての「越境文学」の全体像を眺望する。そこではこれまでの、とりわけ日本国内においての狭義の「越境文学」の在り方が批判的に検証され、「内なる越境」という普遍性を獲得するための布石が打たれていく。

以上のような全体図を描いたのち、本論は第3章において、具体的な作家としてリービ英雄の生涯、そしてその代表作である『千々にくだけで』の世界を詳述していく。日本語の母語話者でないリービ英雄が、父親との確執を経て家出をし、日本文壇を中心に「西洋出身者初の日本語作家」として認知されるに至るまでの、そしてその後の変遷を経て『千々にくだけで』といった作品を執筆する現在までの足取りがまず確認される。そこから、彼が抱え持つ複数言語性によって〈9・11〉への応答が試みられ、非アメリカを提示していくなかで〈9・11〉が相対化されていく『千々にくだけで』の小説世界を考察することになる。私たちはここで、言語的営為としての「越境文学」が、世界を揺るがしたカタストロフィである〈9・11〉に対して対峙しうるものであったことを確かめ、第2章で示唆された「越境文学」の普遍性を再検証していくこととなる。

第4章においては、リービ英雄に代表される「越境者」の生、その実存的なポジショナリティが、単一言語使用者にも敷衍することが可能であると論証されていく。私たちは、アルバックスの「集合的記憶」、ベンヤミンの「歴史の天使」といった概念を援用しながら「越境者」の立ち位置を洗い直し、これまで「越境文学」が論じられることのなかった角度においてその在り方を見つめ直す——越境文学を脱政治化していく。そこで明らかになるのは、「越境者」として生きるには必ずしも複数言語性を帯びず

ともよく、私たちすべての人間に対して「越境文学」は開かれたものであるという普遍的な地平である。

2. 「越境文学」の系譜と展開

2.1 「越境文学」の系譜

本節においては、「越境文学」の系譜を、それをめぐる国際社会(の論じられ方)の変容も考察しつつ、追っていく。西川長夫(2001)による整理から、文化的多元主義(cultural pluralism)、多文化主義(マルチカルチュラリズム multiculturalism)、そしてグローバリゼーション(globalization)という三つの概念の成立を系統立てると、以下ようになる。

I. 文化的多元主義

1930年代より用いられる。主としてヨーロッパ系移民の平等や文化的多様性の主張。

II. 多文化主義

1960年代半ばに文化的多元主義に代わる言葉として登場。先住民や黒人や非ヨーロッパ系の移民、あるいは性差別やあらゆる身体的社会的差別に苦しむ人々の権利擁護や文化的多様性を主張。

III. グローバリゼーション

90年代の初めに、英語圏の文献に登場。「生産・流通・消費までを含む経済活動が、国家の枠を超えて世界的規模で展開されること」¹であり、語の普及自体がグローバリゼーションという現象の一環である。

こういった社会状況に対して、越境文学はどのような歩みを経てきたのか。青柳悦子による分類(2001b)を参考にしながらより便宜的な整理をはかれば、下記の3つのタイプに区分することができる。

① 亡命タイプの移動モデル：

ナボコフ、アゴタ・クリストフ、ミラン・クンデラ、ラフィク・シャミなど

② ポストコロニアル文学：

V・S・ナイポール、サルマン・ラシュディ、マイ

¹ 石川晃弘・竹内郁郎・濱嶋朗編『社会学小辞典〔新版増補版〕』(有斐閣 2005)。

ケル・オンダーチェなど

③ 「移植型」の〈境界児〉：

カズオ・イシグロ、村上春樹、多和田葉子、水村美苗、リービ英雄など

①は、亡命など、政治的な状況によって半ば強制的に移動／越境を体験することになった作家たちである。②は、生まれた土地そのものがすでに越境的性格を帯びており、その状況において自然に越境作家への道を歩んでいった者たちであり、成長した環境がポストコロニアル的なコンテクストを多分に内包した地域であることも特徴的である（青柳は「混血児タイプの多重化モデル：「出生型」の〈境界児〉」と表現している）。③は、生誕の／成長した地そのものが越境的であるのではなく、その後の生涯において国家・地域間における決定的な移動を経験し、越境性を帯びていった執筆者たちのことを指す。

2.2 「越境文学」の限界性

こういった国家や言語の境界を越えた作家たちによる文学を称する「越境文学」というカテゴリーは、その生涯において越境を経験した、あるいは越境的環境に育った作家たちによる文学をひとつの潮流として把握するジャンル名として機能してきた。しかし一方でこの視点では、各自の越境者が抱えている物語をただ認識し合うという地点に留まってしまわないだろうか。作家／作品を「越境文学」の名のもとに個別に認識し、それぞれの営為が「反響」しているとする多文化主義的な理解は、多くの単一言語使用者（潜在的な複数言語使用者）にとって、ジャンルの認識以上の衝撃とはならない。

青柳は言う、「地上のあらゆる場所が〈境界地帯〉となったのだ。わたしたちの誰もが——たとえ自分では気づかなくとも——複数の文化の混在空間のなかに住み込み、そのなかで生きているのである」、同時に「しかしながら本来の意味での複数文化（マルチ・カルチャー）は、いつくかの文化要素が、ある地理空間に同居するだけでは出現しないことに注意したい。文化複合は一人ひとりの人間、私たち自分自身が境界地帯となることによってしか実現されない」（2001a、234）と。私たちの日常事態が越境化し

ている現在において越境文学の意義を考えるべきだ。

2.3 「越境文学」の先駆的概念—ドゥルーズ／ガタリの「マイナー文学」—

以上のような立ち位置を確保しながら越境文学を論じるにあたり、参照すべきはドゥルーズ／ガタリがカフカを引き合いに出しながら語った「マイナー文学」である。それは「大文学（あるいは確立された文学）と呼ばれる文学の内部での、すべての文学の革命的な条件の特徴を示すもの」(31)なのだが、同時に「少数民族が広く使われている言語を用いて創造する文学」(27)だとされるとき、それは私たちが今の課題にとっては、やや狭い概念にはなる。少数民族以外の人間たちは「マイナー文学」、あるいは越境文学を、ただ享受するだけしかないのか、という問題については、ドゥルーズ自身によって、『対話』にて導線が引かれている。

私たちは唯一の言語のうちでさえバイリンガル〔二言語併用〕であるべきであり、私たちの言語の内部でマイナーな言語をもつべきであり、私たち自身の言語からマイナーな語法をつくるべきである。マルチリンガル〔多言語併用〕とは、各々の言語システムがそれ自体において同質的であるような複数の言語システムを所有することだけではない。それはまず、各々の言語システムに変容を及ぼし、それらが同質的であることを妨げる逃走線もしくは変奏線をいうのだ。(・・・)自分自身の言語の中で外国人のように話すこと。(12)

この「逃走線」／「変奏線」を準備することで、「越境文学」という営みはより普遍的な地平を確保することができるはずだ。「自分自身の言語」の中で「越境」を果たすことができれば、「越境文学」の限界性を可能性へと転化する道が拓かれる。

2.4 「越境文学」の可能性—「内なる越境」—

越境文学が特殊な人々による特殊な文学であるという認識から抜け出し、単一言語使用者（潜在的な複数言語使用者）へと切り拓く普遍的な地平を用意

しつつ、越境文学の先駆的概念であるドゥルーズ／ガタリの「マイナー文学」の捉え直しを進めてきた。

ここまで来れば、「越境」という語そのものを考え直す素地ができていると思われる。つまりは、私たちがこれから考えようとしているのは「内なる越境」とでも言うべき、自らの（言語的）土台そのものを見つめ直し、たえず刷新していくような行為なのである。それを現代社会としてのより大きな問題系に結びつければ、社会学者の大澤真幸(2011)が説く「自己の否定性」に基づいた「普遍的な連帯」の可能性へも接続される議論である。各個人・各共同体が抱える個別の物語を否定するというジャンプボードを経て、その外部にお互いが立つという「否定性」によってこそ「普遍的な連帯」の道を探ることができる、という大澤の見解は、そのまま「内なる越境」へも接続することができ、複数言語使用者の営為から抽出されるものを単一言語使用者が受容できる読みが開かれる。単一言語使用者がふだん所与のものとして用いている言語が他者化され、潜在的な複数言語性が湧出してしまふことが目指されるわけだ。

デリダはかつて、「メタ言語の諸効果、相対的な諸効果ないし諸現象、すなわち一つの言語の『内部における』メタ言語のさまざまな中継が、そこに幾分かの翻訳を、進行中の客観化作用をすでに導きいれている」、「それらは、目に見えていながら奇跡のような、亡霊的だが無限に欲望をそそる、そんな或る別の言語の蜃気楼を水平線上に震えるがままにしているのである」(41-42)と述べている。ここにおいて越境文学を通じ、単一言語使用者が「或る別の言語」の可能性を指差し続ける地平が確保される。ドゥルーズ／ガタリがカフカを語る言葉を借りれば、「カフカの孤独は、現代の歴史を横切るすべてのものに対して彼を開いている。K という文字は、もはや語り手も登場人物も指示するものではなく、ひとりの個人がその孤独につながれていればいるほど、一層機械状になる鎖列、一層集団的になる代理人を言い表す」(31)という在り様が伺えるわけである。

このような営為の在り方を具体的に提示している例としては、これから中心に据えるリービ英雄による文章のほかに、多和田葉子が述べる「エクソフォニー」の概念を挙げるができる。2002年にシン

ポジウムで「エクソフォンな作家」という表現を初めて聞き衝撃を受けたという多和田は、そこから自身の感覚へと概念を引き寄せながら、『自分を包んでいる（縛っている）母語の外に出るにどうやって出るか？ 出たらどうなるか？』という創作の場からの好奇心に溢れた冒険的な発想」(2003、6-7)と語る。この主張は、先ほど西川と青柳の分析をもとに区分した「亡命」以降の越境文学の在り方を根本から問い直すものである。また多和田は、「外に出る方法はいろいろあり、外国語の中に入ってみるのは、そのうちの一つの方法に過ぎない」(同、9)と述べており、ここにおいて、「内なる越境」の地平が示唆されている。本稿では以下、「内なる越境」の可能性を探る道程において、リービ英雄『千々にくだけて』を踏まえながら具体的な論考を行う。

3. 「越境文学」とリービ英雄、『千々にくだけて』の越境性

3.1 「越境者」としてのリービ英雄

本節においては、端的に「越境者」としてのリービ英雄の生立ちを概説する。本論冒頭でも述べたように、リービ英雄という存在、そして次節で眺望する彼の著作群は、越境文学が抱え込む複雑なダイナミズム（と、その逆説的な普遍性）を解析するのに適しており、リービ英雄を経ることにより、「内なる越境」をめぐる広範囲な議論が再度検証される。

それは後にリービ英雄（の文学）を「西洋出身者初の日本語作家」という括りから、そして（既存の言い回しで述べるところの）「越境者」から解放する準備をすることとなる。リービ英雄の読解においても、これまで述べてきたような単純な「越境文学」のカテゴライズを内破するような読みはあまりなされていない。例えば近年、永岡杜人(2009)の評論、また自身が台湾で日本語教師として活動する立場から、リービの幼少期における台湾の言語状況などを解き明かした笹沼俊暁の著作(2011)などがあり、リービ作品の言語的側面において豊饒な議論がなされているものの、「越境文学」の在り方自体を刷新するものとはなっていない。本節はリービ作品を今までと異なる光に当てるために、ひとまず彼のこれまでの歩みを三つの時期に区分してスケッチしていく。

1) 家出まで

1950年、リービ英雄はアメリカ・カリフォルニア州バークレーに生まれた。本名はイアン・ヒデオ・リービ。「ヒデオ」は、第二次大戦中、収容所に入れられていた父の友人の日系二世の名からとられた。父は、ブルックリンのユダヤ系中産階級出身、後に外交官となる。母はペンシルベニア州のポーランド系移民の炭鉱夫の家庭に生まれた。1954年には重度の障害を持つ弟が生まれる。

幼いころより、父親の職業上の理由により、台北・台中・香港などを転々とする。特に台中では、大陸からの中国語＝北京語を多く耳にする。両親は離婚、父は上海出身の女性と再婚する（彼女も北京語を扱う）。この過程の中で、「母語」としての英語に加え、「継母国語」として、上手には扱えないが理解できないわけでもない中国語を身につける。父と別れた母に連れられ、ワシントン DC 近郊・アーリントンに住むこととなる。この地で、彼はジョン・F・ケネディの葬列を目撃することになる。

その後、日本に転じた父を訪ねる中で、日本に魅せられ、また大江健三郎など同時代の現代日本文学の存在に気付き始める。17歳の時、横浜のアメリカ領事館の内にある父の住居に滞在。父との対立が深まり、家出を繰り返す。新宿などを彷徨、日本語の世界に同化しようと努める。父の圧倒的な影が差しこんでいる「母語」としての英語でもなく、「継母国語」としての中国語でもなく、彼は第三の言語としての日本語に拘泥するようになる。

2) 翻訳の時代

プリンストン大学・大学院、スタンフォード大学などで研究・教職の道を経ながら、日本との数限りない往還の日々を送る。『万葉集』の全訳で全米図書賞を受賞(1982年)。この時期の立ち位置は、一般的な「ジャパノロジスト」としての活動と捉えられる。もっとも、リービ本人は外部から日本を見るのではなく、同化しようという意志を持ち続けている。『万葉集』の豊饒さにのめり込みながらも、その作品世界を研究しようとすることによって単なる「ジャパノロジスト」として認識されるというパラドキシカ

ルな状況を耐え忍んだ時期だと見ることができる。

その後、中上健次の作品を翻訳。彼からの薦めで、日本語での創作活動に入る。

3) 創作の時代

スタンフォード大学准教授として教鞭をとりながら、「星条旗の聞こえない部屋」執筆、1987年に発表する（野間文芸新人賞受賞）。1990年には職を辞し、日本に定住する。以降、日本語での執筆活動に従事するようになる。

それまでは、カリフォルニアから逃げるようにして新宿へと何度も足を運び、かつて家出をしたときに逃げ込んだその新宿という街の中で、アメリカを遠ざけようとする『星条旗の聞こえない部屋』を執筆していた、ということになる。この時期以降、リービにとって遠景であり続けたアメリカが、後に彼の眼前に<9・11>というカタストロフィとなって再度顕現してくる体験が、『千々にくだけて』のテキストとなると考えてよいだろう。

さて、以上の三つの時期区分を経験しながら、リービ英雄は作家として大成していくこととなる。ここから彼が日本語作家として歩んできた道程を振り返ることとする。

3.2 リービ英雄の「越境文学」

本節では、彼による「越境文学」を概観し、「越境者」たる彼が手がけていった作品群——活動初期における翻訳物から現在の創作物——までをまとめていく。ここでも、三つの時期区分が可能となる。

1) 初期

先述した「翻訳の時代」にあたる。1982年に『万葉集』の全訳で全米図書賞を受賞するなど、ジャパノロジストの立場として日本文学の研究・紹介に従事する（この『万葉集』の翻訳・解釈は、後に『英語で読む万葉集』として、日本国内でパッケージし直されている）。自ら日本語による創作へと踏み出していききっかけを作った中上健次の作品の翻訳もこの時期に手がけている。

2) 中期

「創作の時代」における初期、とも捉えることができる。

自らの少年期の家出の記憶を材にとった『星条旗の聞こえない部屋』を1992年刊行。その後、日本語／英語、日本／アメリカの対立構造を乗り越え、「西洋出身者初の日本語作家」としての地位を確立。この「対立構造」、その乗り越えが、逆説的に「戦後日本文学」の文脈に接続されている。

リービ本人が「西洋出身者初の日本語作家」というカテゴライズを自認していることも注目に値する。「星条旗の聞こえない部屋」を『群像』誌上で発表して以来の、「なぜ日本語で書くのか」を問い続ける周囲の反応、それに対する自らの立ち位置について、以下のように逡巡しながらも述べている。

西洋文化からドロップ・アウトして、絶えず日本の内と外の見えない境界線にさすらって生きる人間のよろこびとみじめさを物語につづるのは、日本語で小説を書く十分な理由にならないだろうか。

小説に限らず日本語で書くもう一つの理由がある。ごく単純に言えば、書けないと思われるから書く、ということだ。ぼくの中にもそのようなはずみは確かにある。(1992、67)

ここに「越境文学」がもつ一つのアンビヴァレンスを見出すことができる。果たして、越えるべき「境界線」が存在しなくなったときに「越境文学」は不可能になってしまうのか。しかし、圧倒的多数の単一言語使用者たちにとっては、日常においてその「境界線」は存在しないも同然なのである（だからこそ「見えない」境界線だとリービ英雄は述べている）。「越境文学」が普遍性を獲得するには、「境界線」が見えない単一言語使用者にも「越境」が可能であるのだという地平を指し示さねばならないだろう。

3) 現在まで

彼の作品世界に、敬遠していた「中国（語）」が呼び戻されてくるのがこの時期である。1993年に雑誌の取材で生まれて初めて天安門広場へ足を運び、毛沢東の遺体を目にする。圧倒的に「公」的——政治

的な磁場に支配された空間を日本語で書こうと決意する。そこで執筆された小説が『天安門』である。

「近代百余年の「日本語の特徴」がひたすら西洋語との対比をもとに考えられてきたということ、そして今、中国へ渡ってもどってきた自分の実際の動きによって、それより十倍も古い「比較」の場に、じかに触れたような気がする」(2001、38)とリービ自身が述べているように、日本語が中国大陸を描き切ることができるのか、という問いに自ら応答しようとした、ということの意義は大きい。これは英語／日本語の二つの次元で行われてきたそれまでの「比較」という全体状況もさることながら、それに批判的であった自身さえもデビュー以来の小説は英語／日本語という二つの側面に拘泥していた歩みからの脱却でもあり、幼年期以来避けてきた（北京語を中心とした）中国語、さらには『万葉集』に代表されるように日本語の歴史そのものが密接な繋がりをもつ中国大陸が、二重の意味で回帰してきたと捉えることができる。

その後、消えゆく路地「胡同（フートン）」を追いながら、繰り返し中国へ渡り、奥部へと探訪を進める。ここから、日本語を中心にしながら、英語・中国語もあわせて執筆が進められることにより、作品群はよりポリフォニカルになる。2001年8月26日、河南省開封で古代ユダヤ人が中国に同化していた「越境」の跡を見つける（日本語の世界に同化できるかどうかを試行し続けてきたリービにとって、この発見は重大な意味をもつことになった）。9月6日に東京に帰り、11日にバンクーバー経由でニューヨークへ向かって出発。米国に入れず、日本へも戻れず、カナダに足止め。この経験から『千々にくだけで』を執筆する。2011年には『星条旗の聞こえない部屋』の英訳 *A Room Where the Star-Spangled Banner Cannot Be Heard* が出版され、日本語作家としてのリービ英雄の（再）評価が海外でも進んでいる。また2012年の『大陸へ』では、近年の度重なる中国紀行と同時に、オバマ大統領誕生後のアメリカも歩き、二つの「大陸」の現在を書こうとするリービの最新の執筆姿勢が伺える。

以上から分かるように、私たちが取り扱う『千々にくだけで』というテキストは、リービ英雄にとつ

て転換期にあたる時期に執筆されたテキストである。故に多様なベクトルを内に抱え込み、様々な角度からの読みを可能にする豊饒な作品となっている。以下、〈9・11〉への応答という視点から、『千々にくだけで』の内容へと入っていく。

3.3 『千々にくだけで』—〈9・11〉への応答—

『千々にくだけで』の主人公である翻訳家・エドワードはアメリカの母の家へ向かうため、カナダ・バンクーバー行きの飛行機に乗る（ヘビー・スモーカーであるため、中継地での喫煙を目論んでの航路である）。しかしバンクーバーに着陸した——アメリカの「周縁」であるカナダに到着した——機内で、機長から〈9・11〉の初報が伝えられる。

（・・・）たぶん、機長室にはその連絡がすでに何時間も前に入ったのだろう、平板な声で、

the United States

と機長がまた言いだした。

それから、ゆっくりと、優しげな口調となって、

has been a victim

と言いつづけた。

耳に入ったそのことばは、意味をなさなかった。

頭の中で奇妙な日本語が響こうとした。

アメリカ合衆国は、被害者となった

of a major terrorist attack

アメリカ合衆国は、甚大なテロ攻撃の被害者となった(2005、16-17)

そして、アメリカ合衆国の国境がすべて閉鎖されたことが発覚する。このために、エドワードはカナダに足止めされることになる。事態に戸惑う彼は、やや時間を置いて、後述するように宿泊先のテレビで〈9・11〉の映像——ツインタワーの崩壊——を目の当たりにする。このように、容易に受け止めることが不可能なカタストロフィとしての〈9・11〉が、エドワードを打ちのめす。『千々にくだけで』は、このカタストロフィを、後に見るように言語的複数性において何とか受容するべく四苦八苦していく小説

として読むことができるのだが、そこで彼が戦うのは——彼が大江健三郎との対談で持ち出した言葉を援用すれば——西洋の「モデル」である。

『千々にくだけで』という、〈9・11〉の小説を日本語で書いたんですが、（・・・）そのときに、じつは世界というのは、結局ヨーロッパとヨーロッパの近隣の外部の地域との長い虐待関係の歴史を語る言葉によって定義されていることを思い知らされたわけです。

言語をはじめとした西洋の「モデル」の強さがすごく暴力的に感じられて、場合によっては、日本と韓国、日本と中国の関係の歴史ですら、西洋と中近東の関係を語る言葉で語られているという不満を持っていました。これには、自分が日本の外部、しかもアジアではない外部から日本のなかに入り込んできたということも複雑に関係しています。(2007、167-68)

リービは「モデル」という語を厳密に定義して使用しているわけではないが、「虐待関係」というリービの発言からすれば、植民地支配から、〈9・11〉以降のアフガニスタン戦争・イラク戦争といった現在まで、時代ごとに「外部」を——虐殺・殺戮をも行いながら——支配してきた西洋の暴力性のことを指していると考えられる。しかもリービが「自分が日本の外部、しかもアジアではない外部から日本のなかに入り込んできたということも複雑に関係している」と述べるように、その「モデル」に違和感を抱いている自身がその「モデル」の体現者だとみなされかねないという再帰性を、リービは携えながら生きねばならない存在である。このアンビヴァレントなリービの生の在り方は、実際に『千々にくだけで』の筋を追うことでさらに明らかになる。

〈9・11〉の映像にエドワードは打ちのめされるが、その後、「周縁」であるはずのカナダの街頭は、一瞬にしてアメリカへと同化していき、彼をさらに圧倒することになる。エドワードはここに、嫌悪とさえ言ってもよい感情を抱いている。たとえば、宿泊先の近くの公園の風景は以下のように一変する。

噴水のまわりは何百枚もの色とりどりの張り紙におおわれていた。

近づいてみると、張り紙には「殺すな」とか「復讐を考えるな」とか、ただ「悲しみをもって」といった意味の短いことばが書かれていた。中には泣き顔やピース・マークをクレヨンで描いた絵もあった。噴水の上には、「ことばとアートで気持ちを表現しましょう」という横断幕が掛かって揺れていた。噴水のほとりで、男女とも長い髪で色白の若い人たちが次々とクレヨンで紙の上にことばと絵を描いていた。

ただでさえ熱さの足りない空気が噴水のしぶきでさらに冷え込んでいた。噴水のまわりを埋め尽くした何百もの「自己表現」の前でエドワードは立ちつくした。鮮やか過ぎる色と単純すぎることばが次々と目に入った。見ているうちにエドワードはすこしずつ吐き気をもよおしてきた。(2005、56)

なぜエドワードは「吐き気」をもよおすに至るのであろうか。それは先述した西洋の「モデル」が帯びる暴力性、その外部との「虐待関係」に密接にかかわるものである。すなわち、なぜ自分たち（と、カナダの人びとが自らを同化しているアメリカ）が攻撃されるに至ったのか、これまでの中東との関係性に問題はなかったのか、「虐待関係」はなかったのか、といった自省がすべて省略され、自分たちを無辜なる「犠牲者」の位置にすみやかに収束させ、自己憐憫に入り浸っている様子に、エドワードは矛盾を感じているわけである。

また、「モデル」の暴力性は通時的に、リービを、そして私たちを取り囲む「世界」を支配してきた力学なのである。『千々にくだけで』の中では、エドワードが訪れた美術館に飾られている「エドワードの知らない、二十世紀初頭にこの近くにすんでいた老女の画家の絵」が登場する。そこには、エキゾチズムのもと、イヌイットのトーテム・ポールがいくつも描かれている。眺めているうち、テレビで見かけた、<9・11>での行方不明者の家族へのインタビューがフラッシュ・バックする。

(・・・) 生きたイヌイットの姿はどこにもなく、淋しい入江と松林の獣道に、トーテム・ポールが一本一本静かな光につつまれていた。

百年前の絵の具のにおいが立ちこめた。

部屋に自分が一人にいるのに気がついた。まだまだ奥の部屋に展示がつづいていた。

白人の老女のトーテム・ポールたちが壁という壁にゆらめいていた。エドワードはめまいを感じはじめた。頭の中で若い女の英語の声がこだました。

Please find my brother

頭の中のテレビから石とガラスが崩れる音がもれだした。

帰りたい、とエドワードは思わず日本語でつぶやいた。(同、81-82)

イヌイットたちが手がけたトーテム・ポールを描いているのにもかかわらず、そこに「生きたイヌイットの姿はどこにもない」ことに注目したい。ネイティブ・アメリカンが定住していた大陸に大挙して押し寄せ、彼ら原住民をことごとく駆逐した挙句、その「歴史」がなかったかのように振舞う無頓着さ、あるいはその殲滅された相手の魂たるトーテム・ポールを甘美な感情によって描くことができちゃうその鈍感さこそが、「モデル」の暴力性の格好の具体例だと言ってもよいだろう。その「歴史」の積み重ねの結果、石とガラスの瓦礫の中に若い女の「brother」は消えることとなった。このような悲劇が起こってなおも——本人たちは無自覚ながら——無邪気な犠牲者を装う、噴水の周囲に「自己表現」を書き連ねた人びとがいたのだ(9月12日には噴水を埋め尽くしていた「自己表現」が、翌13日には数が減っていたという描写も興味深い)。

ニューヨークを発生源にして、カナダの国境の町まで満ちてくる「モデル」の力。他方での、その町に通時的に胚胎していた「モデル」の根の深さ。この小説における「モデル」とは、ひとまず「アメリカ」の覇権性として理解してよいだろう。これに対しエドワードは絶望と敵意を抱きながら、<9・11>の乗り越えを図っていかうとする。その企みの核心にある越境性を、次節で洗い出していく。

3.4 越境—非アメリカの提示による〈9・11〉の相対化—

先述したエドワードと〈9・11〉の映像との出会いは、バンクーバーの中心街から離れた自然公園近くのアパート式ホテルにおいてであった。エドワードが初めて〈9・11〉そのものの映像を観た際に、『千々にくだけで』という作品の緊迫感の一つの頂点を迎える。そこで彼は、飛行機の窓から見た小島の数々に対して、芭蕉の句「松島や千々にくだけで夏の海」、その英訳「All those islands! Broken into thousands of pieces, The summer sea.」を想起したことを思い出す。尋常でないカタストロフィを、日本語／英語の二層性、すなわち越境による言語的複数性において受け止めようとする、この作品の狙いが明らかになる。

上から陥没し、流れ落ちる建物は、巨大なこぶしでつぶされる砂の城のように、石と鉄がおびただしい滝となって細かく縦にこぼれだした。建物の横はばいっばいに同じ細かい動きが映り、単調な灰色からエドワードは一瞬、テレビが白黒テレビに変わったと思った。

Oh no, oh no

暗い横丁の隅から、男の声、女の声が聞こえた。

南の塔が崩壊したあとに、北の塔も、たやすく、流れ落ちた。

見ているエドワードの耳に、音が響いた。

ちちにくだけで

たやすく、ちちにくだけで、broken, broken into thousands of pieces

音の破片が頭の中を走りまわった。

エドワードは気が遠くなりはじめた。

Oh no, oh no

煙が上がった。

like a mushroom cloud、というアナウンサーの声がした。きのご雲のようだ、とエドワードには聞こえた。(同、40-41)

芭蕉の句に加え、「like a mushroom cloud」「きのご雲のようだ」というアナウンサーのフレーズにも注意したい。芭蕉の句によって日本語のコンテクスト

が前景化されているこの箇所において、「きのご雲」と言われれば広島／長崎の原爆を想起される。ここには言語的な重ね描きのみならず、2001年と1945年を往復する通時的な重層性も埋め込まれている。

さらに、日本語と英語の二層性だけでなく、リービはさらなる仕掛けを小説に施す。アメリカ入国が可能となるも東京へ戻ることを決めたエドワードは、ホテル近くの自然公園を——さらには「密林の中を切り開いた開拓地」を——歩くなかで、トーテム・ポールを見つける。このトーテム・ポールは、先ほどの美術館で見かけた老女の描くトーテム・ポール、そしてそのネガティブな印象を呼び起こすものの、これから見るように、その存在は一転して肯定的な意味合いを帯びることになる。大型バスに乗ってやってきた「二十人も三十人ももの（・・・）黒髪の乗客」たちが、「ニーカン!」、つまり「あなた、見てよ」という笑い声を上げながらトーテム・ポールを取り囲んでいくのである。それは「もうひとつの大陸の明るい声」と書かれている(同、112-114)。

以上のように、日本語／英語という二項による越境性ではなく、そこに更に中国語という異言語が組み込まれ複雑さを増していく——「もうひとつの大陸」中国という「非アメリカ」の位相を提示し、アメリカを相対化する——中で、『千々にくだけで』は〈9・11〉のカタストロフィに抗していく。さらに細分化すれば、その「相対化」は、次の6つの「非アメリカ」の表出から成り立っている。①現代のカナダ、②(芭蕉の句に見られる)江戸期日本、③戦後日本(次節で詳説)、④ネイティブ・アメリカンたちの時代(またはネイティブ・アメリカンが駆逐された時代・土地としてのカナダ)、⑤現代中国、⑥エドワードが帰りたがっている現代日本である。

時空間を異にする「非アメリカ」が幾重にも織り込まれることで、〈9・11〉は、暴力的「モデル」に回収されることなく受け止められるのである。次章においては、『千々にくだけで』を広い文脈の中に置き直し、その可能性を精査していく。

4. 「越境文学」における「集合的記憶」

4.1 「集合的記憶」の「複数保持」

本章では今一度、「越境文学」を単一言語使用者(潜在的な複数言語使用者)へと解き放ち「内なる越境」を可能とするうえで、より実存的な意味合いにおいて「越境者」の在り方を追究していくこととする。そこで真っ先に問わなければならないのが「集合的記憶」(アルバックス)の問題系である。複数の「集合的記憶」を内包する越境文学作品は枚挙に暇がない。彼らは各コミュニティの「集合的記憶」が組み合わさった、ハイブリッドな歴史を個人的記憶として宿し、一つの物語としての生を生きている。アルバックスは「集合的記憶がその力と持続を得るのは、それが人びとの全体を支えとしているからであるとしても、集団の成員として思い出するのは個人である」(43)と述べるが、既存のコミュニティを逸脱する越境者たちが、複数のコミュニティの歴史を自らの内に胚胎させているのである。

先述した青柳の「文化複合は一人ひとりの人間、私たち自分自身が境界地帯となることによってしか実現されない」という主張を思い返したい。越境文学が、「越境者」だけでなく、境界地帯に生きる私たちすべての人間に対して開かれているように、「集合的記憶」も逆説的ではあるが個人に胚胎している。²

実際に、『千々にくだけで』の中で、カナダ・バンクーバーに足止めをくらった飛行機の機内でのエドワードの視野を確認しておこう。

アメリカ合衆国は、南に当る右側の、ここから遠くない国境線の向こうで広がっていた。国境の南に広がる見えない国土の中には、エドワードの母と、二人の妹がいた。その夜おそく、乗りつぎ便でニューヨークに到着したあと、一人の妹と五十七ストリートのホテルで再会する約束をしていた。その翌日、ワシントンの母の家まで行って、

母と、別の妹に会うはずだった。

客室の中は静まりかえった。頭の中で巨大な白紙となった「アメリカ合衆国」の午後の空には、小さな原爆が、もしかしたらそこ、もしかしたらそこで爆裂した。母の家が燃え上り、妹がブルックリン・ブリッジから落ちた。(2005、20)

<9・11>の全体像が見えない時点で、茫漠たるアメリカの光景の中に数々の「小さな原爆」を見てしまう想像力——しかしそのハイブリッドな「集合的記憶」は、繰り返すように「越境者」だけに許されたものではない。私たち個人が「境界地帯」に生きるのであれば、それに見合う細分化された「集合的記憶」の複数所持が可能なはずである。次節では『千々にくだけで』が、<9・11>を私小説として昇華した作品であるという観点から、この越境文学と「集合的記憶」の接点をさらに見つめることとする。

4.2 「越境者」による私小説と他者

リービ英雄は、自らを日本文学の歴史に接続することに拘泥している。そしてその小説を構成する手法は、いわゆる私小説と呼ばれるものである。しかし同時に、その筆致には近代以降の日本において書き連ねられてきた私小説とは、微妙だが決定的な差異が含まれている。青柳が「本来『内閉』を本質的特徴としていたはずの〈私小説〉がいわば脱構築され、自己の特殊性を世界のなかで共振をひきおこすべきものとして提示するような『開かれた』私小説が、ここに生み出された」(2001a、258)とするように、日本文学史に自らを接続させようとしながらも、「越境者」としての背景から、私小説的であることがそのまま「越境文学」となっていくリービ英雄の逆説的な立ち位置がここで浮かび上がってくる。実際に『千々にくだけで』のテキストに立ち戻りながら、その振る舞いを考察してみよう。

機内でテロ発生が伝えられた際の描写を見てみたい。機長のアナウンスが終了した後、隣り合わせの席になった日本人の老女と交わす会話が参考となる。「戦争が終わったとき」のことを口にする彼女が、エドワードには「焼け跡の中で家に帰ろうとしているもんぺ姿の女学生」に見えるのだ(2005、25)。こ

² 通常アルバックスの「集合的記憶」は、「記憶」の議論を、心理学的な個人の記憶ではなく、コミュニティに属したものとして捉え直した功績が大きい。私たちはその意義を十分に認識しつつ、その「集合的記憶」を複数保持している個人がいる、という新たな次元をここで提唱するものである。

の「集合的記憶」を複数所持した他者との遭遇という事態は、アメリカと、逆説的にその代名詞となった<9・11>を相対化するものである。未曾有の出来事として捉えられがちな<9・11>が、「戦争が終わったとき」の日本の老女の記憶が引き合いに出されることによって、その仮初めの独自性が瓦解していくこと。この小説においては<9・11>が問題であったが、限りなく他者と遭遇しながら世界を相対化していくこの立ち位置は、必ずしもこれまで言われてきたような「越境者」たちだけに許されたものではなく、自らを「境界地帯」に生きるものとして認識し、「私」を開かれたものとして存在しようとする人間においては、普遍的に可能なものであると考える。突然に迫りくる他者——そこから地続きとなっている<9・11>を受け止める、開かれた「私」の所作こそが、私たちが学びとるべきものであろう。

4.3 「歴史の天使」としての越境者—「越境文学」の脱-政治化

ベンヤミンの議論を参照すれば、ここでの越境者の立脚点は、「歴史の天使」という概念を用いて考察することが可能だ。ベンヤミンは「歴史の概念について」という文章の中で、大小の区別なくすべての歴史的な出来事を、その最終的な地点から編纂することができるような者のことを「年代記者」(647)と呼びつつ、これと対照的に、「過去の真のイメージはさっと掠め過ぎてゆく」(648)という位相にある者を「歴史の天使」と名づけている。

「新しい天使(アンゲルス・ノーヴス)」と題されたクレアの絵がある。それにはひとりの天使が描かれていて、この天使はじっと見詰めている何かから、いままさに遠ざかろうとしている何かに見える。その眼は大きく見開かれ、口はあき、そして翼は広げられている。歴史の天使はこのような姿をしているにちがいない。彼は顔を過去の方に向けている。私たちの眼には物事の連鎖が立ち現れてくるところに、彼はただひとつの破局(カタストロフ)だけを見るのだ。その破局はひっきりなしに瓦礫のうえに瓦礫を積み重ねて、それを彼の足元に投げつけている。きっと彼は、なろう

ことならそこにとどまり、死者たちを目覚めさせ、破壊されたものを寄せ集めて繋ぎ合わせたいのだろう。ところが楽園から風が吹きつけていて、それが彼の翼にはらまれ、あまりの激しさに天使はもはや翼を閉じることができない。この嵐が彼を、背を向けている未来の方へ引き留めがたく押し流していき、その間にも彼の眼前では、瓦礫の山が積み上がって天にも届かんばかりである。(653)

リービ英雄に引きつけていけば、この「歴史の天使」は、複数の「集合的記憶」を保持しながら、かつ自らを通り過ぎていく他者からもその歴史的記憶＝「瓦礫」が投げつけられ、その積み重なる山を見て呆然としながらも歩み続ける生の在り方のことだ。

私たちは世界の断片を投げつけられながら生きる「歴史の天使」の単独者としての在り方にこそ眼を向けるべきであろう。リービ英雄は、彼は自身の存在の意味そのものを、少年期に家出をしたころから、中国大陸に頻繁に足を運ぶようになった現在まで、問われ続けている。例えば中国の路地を旅する間、彼が現地の人間から頻繁に投げつけられることばは「老外！」(ラオワイ＝外国人の意味)なのだ。そのリービが、ベンヤミンのいうところの「翼」を広げるとき、彼の足元には<9・11>も、芭蕉の句も、戦争経験者である老婆の記憶も、現代中国の晴れやかな言語も、平等に「瓦礫」として吹きつけてくる。

世界の側からその存在の意味を問われ続ける「越境者」は、その世界を相対化する力をもつ者たちでもある。単独者としてのその強靱な在り方を、『千々にくだけで』で私たちは見てきた。自らの存在を絶えず問い直し、周囲からも問い直され、世界に溢れかえる他者に対して常に「私」を開き続けるこの越境者は、決して特殊な人々ではない。友／敵を分離するC・シュミットの「政治」の磁場から越境文学を解放し、「歴史の天使」の翼を持つ「内なる越境者」として生きること。それこそ本稿が主張する「越境者」の新たな次元である。

5. 「越境文学」の今後

「越境文学」の閉鎖的な捉え方に疑義を呈し、ポスト「マイナー文学」といった位相を取り上げなが

ら「内なる越境」の可能性を目指した本稿は、リービ英雄『千々にくだけで』を具体例として考察を進めてきた。非アメリカを提示する＝越境することで<9・11>に応答しようとした『千々にくだけで』を、「集合的記憶」との関連性において検証することで、その普遍性がさらに明らかになっていった。その立ち位置は越境者にのみ可能なものではなく、開かれた「私」という在り方に及ぶことによって、歴史／世界の断片が足元に吹き付けてくる「歴史の天使」という単独者、という生が単一言語使用者（潜在的な複数言語使用者）に開かれることとなる。

現状において充足している単一言語使用者（潜在的な複数言語使用者）に対して訴求力をもつのか、その生の在り方の変更を迫ることが可能なのか——いわゆる「動機づけ」の問題はあるが、内なる越境者として生きることを強制することなく、その地平を指し示すことは可能である。筆者は、単一言語使用者の現状そのものが「越境者」的だ、というように、布置そのものを転換させてしまうことが重要だと考える。現状を変えるのではなく、現状への言及の仕方を変更してしまうこと。それが言説の側に期待される所作である。

参考文献

- リービ英雄 『アイデンティティーズ』 講談社 1997
- 『英語で読む万葉集』 岩波新書 2004
- 『越境の声』 岩波書店 2007
- 『延安 革命聖地への旅』 岩波書店 2008
- 『仮の水』 講談社 2008
- 『国民のうた』 講談社 1998
- 『最後の国境への旅』 中央公論新社 2000
- 『新宿の万葉集』 朝日新聞社 1996
- 『星条旗の聞こえない部屋』 講談社文芸文庫 2004
- 『大陸へ アメリカと中国の現在を日本語で書く』 岩波書店 2012
- 『千々にくだけで』 講談社 2005
- 『天安門』 講談社 1996
- 『日本語の勝利』 講談社 1992
- 『日本語を書く部屋』 岩波書店 2001

- 『我的中国』 岩波書店 2004
- 『我的日本語』 筑摩書房 2010
- Levy, Hideo. *A Room Where the Star-Spangled Banner Cannot Be Heard*. New York: Columbia UP, 2011.
- 青柳悦子 「境界地帯の子どもたち 現代的越境者にみる文学の渴望」(土田知則・青柳悦子編 『文学理論のプラクティス』新曜社 2001)
- 「複数性と文学—移植型<境界児>リービ英雄と水村美苗にみる文学の渴望」(『言語文化論集』筑波大学現代語・現代文化学系 第56号 2001)
- 大澤真幸 『「正義」を考える 生きづらさと向き合う社会学』 NHK 出版新書 2011
- 笹沼俊暁 『リービ英雄—「鄙」の言葉としての日本語』 論創社 2011
- 多和田葉子 『エクソフォニー——母語の外へ出る旅』 岩波書店 2003
- 永岡杜人 「言語についての小説——リービ英雄論」(『群像』 講談社 2009年6月号)
- 西川長夫 『増補 国境の越え方 国民国家論序説』 平凡社ライブラリー 2001
- M.アルバックス 小関藤一郎訳 『集合的記憶』 行路社 1989
- ヴァルター・ベンヤミン 「歴史の概念について」(浅井健二郎編訳 久保哲司訳『ベンヤミン・コレクション I 近代の意味』 ちくま学芸文庫 199年)
- ジル・ドゥルーズ／フェリックス・ガタリ 宇波彰／岩田行一訳 『カフカ——マイナー文学のために』 法政大学出版局 1978
- ジル・ドゥルーズ 江川隆男・増田靖彦訳 『対話』 河出書房新社 2008
- ジャック・デリダ 守中高明訳 『たった一つの、私のものではない言葉——他者の単一言語使用』 岩波書店 2001
- C.シュミット 田中浩／原田武雄訳 『政治的なものの概念』 未来社 1970

(Received: May 31, 2012)

(Issued in internet Edition: July 1, 2012)